

提婆達多品における女人成仏について (1)

望 月 海 淑

女人劣視の傾向あった仏教の歴史において、一分なりとも女人に対する態度をかえたものは変成男子思想であったというる。一乗思想を高唱したといわれる法華経の中で、提婆達多品はこの変成男子によって八才の竜女の成仏を示し、女人成仏について光明を与えたとなされている。そして、この変成男子は女身を男身にかえること、更に有態に言えば女根を男根に変え、完全に男身を現することによってなし遂げられるものなるは前述の通りである。完全に男身を現するとは梵文法華経の

Tat stri ndriyam antarhīam puruṣāndriyam ca pṛadurbhūtam bodhisattva-bhūtam c' atmanam
sāndarśayati^②

文に依るものであり、男根を現することが菩薩としての自我——特性・要素——を現するものであることを意味している。換言すると、菩薩は男身でなければならぬことを内包しているといわなければならない。即ち、変成男子が女人の成仏を可能ならしめたものであるといいながら、その根底には女人劣視の気配の存することを無視することは出来ない。前述の「一分なりとも」と称した点もこゝに由来する。

(44)

仏としての特相を示すものとして三十二相をあげることが出来る。三十二相は仏身が備えており、他の衆生には見られない肉体上の特徴の三十二種類を意味するが、その中の一つに陰蔵相(男根)が存することを我々は想起しなければならぬ。即ち、男根を所有することは成仏することの不可欠の条件といわなければならない。

三十二相が何時頃出来上つたかは明白ではないが、恐らく釈尊当時のバラモンに於て、この言葉はすでに用いられておつたものであろうといわれている。そして、釈尊滅后に仏身觀の確立、仏像の造形等に於ける必要上、この三十二相が仏教の中にもとり入れられて来たものと思われる。

干潟博士はその著作の中で仏身造像の推定年代にふれ、三十二相のうちの重要なもので造像の場合にそれに依ることが都合のよいものもあるとして、白毫相・金色相・頂髻相・陰蔵相・手足千輪輪相・手足綬網相等を挙げて、これらは造像の起る前に定まっていたであろうとし、その他種々の事情から造像年代はA・D一世紀後半であるとなしている。有態に言えば、A・D一世紀後半には仏身造像の歴史の上に於ても、すでに陰蔵相は不可欠の条件となり得たことを示しているというる^④。即ち、変成男子の歴史は古く、女性劣視の風潮は根強いものがあつたといわなければならないであらう。

(45)

- ① 樓神第三十六号成載。女人成仏—変成男子について—参証
- ② 南条土田本梵文法華経 P 227
- ③ 干潟竜祥著ジャータカ概観 P 11~17 参
- ④ 島尊一郎氏は、その論文、仏典にみられる相好の研究の中で、釈尊も三十二相の講述をせられ、釈尊自身もまたこれによつて占相對象となつておられるので、釈尊の創始した説でないことは明白である^④と、指摘している。これから考えると、三十二相の言葉の發生は遠く紀元前、釈尊在世当時、乃至それ以前にさかのぼることが出来る。

法華經提婆達多品に於ける竜女成仏もまた變成男子であることは周知のところである。そして、變成男子は女根を男根に転ずることであるために、成仏した竜女は三十二相を具することが示されている。逆に三十二相を具することが仏の特相であるならば、女人の成仏には變成男子の転身を具備しなければならぬ。如何にして、竜女のこの転身は可能であったか。

妙法蓮華経には次の如き記述を認めうる。

有_レ娑_レ竭_レ羅_レ竜_レ王_レ女。年始_レ八_レ才。智慧_レ利_レ根_レ善_レ知_レ衆_レ生_レ諸_レ根_レ行_レ業。得_レ陀_レ羅_レ尼。諸_レ仏_レ所_レ説_レ甚_レ深_レ秘_レ藏_レ悉_レ能_レ受_レ持。深_レ入_レ禪_レ定。了_レ達_レ諸_レ法。於_レ利_レ那_レ頃_レ發_レ菩_レ提_レ心。得_レ不退_レ轉。弁_レ才_レ無_レ礙。慈_レ念_レ衆_レ生_レ猶_レ如_レ赤_レ子。功_レ徳_レ具_レ足。心_レ念_レ口_レ演_レ微妙_レ大_レ慈_レ悲_レ仁_レ讓。志_レ意_レ和_レ雅_レ能_レ至_レ菩_レ提_レ①。

この文は、文殊支利が海中の教化に於て常に法華経を説き、数えることも出来ない多数の人々に菩提を得せしめた、と語るのに対して、智積菩薩が疑を抱き、法華経は甚深微妙であり諸経中の宝であるのに、説示を聞いただけの簡単なことで彼等が成仏なし得たとは信じられない、とする反発によって語られた文殊支利の言葉の一節である。尚この箇所についての正法華経は

竜王有_レ女_レ厥_レ年_レ八_レ才。聡_レ明_レ智_レ慧_レ与_レ衆_レ超_レ異。發_レ大_レ道_レ意_レ志_レ願_レ弘_レ広。性_レ行_レ和_レ雅_レ而_レ不_レ倉_レ卒。便_レ可_レ成_レ仏②。

と極めて簡明に終っている。梵文法華経は

asi kula-putra sāgarasya nṅa-rājho dñhita 'śia-varṣa jātyā mahā-praiñā tikuṣṅṅndriyā
jāna-pūvaṅ-gamena kāya-vāñ manas-karmaṇā samanvāgata sarva-tathāgata-bhāṣita-
vyañjanāthōdgrahaṇe dharaṇi-pratiabdhā sarva-dharma-sattva-samādhāna-samādhī-sahasraika
-kṣaṇa-pratīabhinī | bodhi-citāvinivartini viśtrīṅa-prañidhānā-sarva-sattveṣv ātma-premānugata
gūṇōpādane ca samartha na ca tebhyaṅ parihyate | smita-mukhi paramayā śubha-varṇa
-puskaratayā samanvāgata maitra-citā karuṇāñ ca vācañ bhāṣate | sā samyāk-saṃbodhim
abhisambōddhañ samartha | ③

(善男子よ。生年八才になる海竜王の娘あり。大慈・利根なる進める智、身・口・意の業を具して、一切の如来の明快な相なるものの撰受の点で得られたるアラニ、一切法の衆生施設の千の禪定を一瞬に得。菩提心を退転せず、一切衆生等の中にふりまかれたる誓願、自我の愛に随える福德の発起におけると意鏡を同じくし、亦それらから動かされることはない。微笑せる面、最も美しい色の青蓮華を具え、慈悲の心、大悲の語を語り。彼女は正覚の証に意鏡同じである。)

と正法華経に比らべて妙法華経と梵文法華経とは、その説示が詳細であるといいうる。この引用は長慢のきらいを失うことは出来ないが、この文の中に竜女の転身出来得た理由が存するように想われる。即ち正法華経は、竜女が大道の心を発し弘広を志願し性行和雅にして倉卒せざる故に成仏すべし、となしておる。このことは、自己の覚と、一切衆生の教化とに対する志を竜女が退転させない故に、換言すれば、大乘の道を歩んでおるが故に成仏出来得たことを示すに外ならない。妙法華経は、諸仏の教えを全く受持した上で、禪定に入り諸法を了達し菩提の心に不退転であることと、衆生に対して慈悲仁讓・志意和雅にしてこれを導くことをとり挙げておるといいうる。梵文法華経は、

不退転の菩提心、衆生救済の誓願・衆生における福德の発生に心がけ、このような心構えを変えることなく慈悲心をもって彼等を導くことが等正覚をとり得た因であるとなしているといいうるであろう。そして、これらのことは更に、竜女の語る偈の中で如夷に示される。即ち、妙法華経は

又聞成菩提^④ 唯仏当証知^④ 我闍大乘教^④ 度脱苦衆生^④

と示し、正法華経は

今我欲成仏 説法救群生^⑤

と語り、梵文法華経は次の如く語っている。

yathacchayā me sambodhiḥ sakṣi me 'tra tathāgataḥ |

visiṅṅaṃ deśayisyāmi dharmam dukkha pramocanam || 51 ||

(この点で如来よ私のために証知すべし。私のために正覚が希求することく、苦をとり去るべき故に法をまさせよう。51)

正法華経の法を説いて群生を救うことの法は大乘の教であり、visiṅṅam dīdharma(51)であろう。visiṅṅaは広いもの、従って大乘を示したものと想われる。そして、文殊利が海中に於て法華経を宣説したとするこの直前の記述からすれば、この法は法華経を指したものとわなければならない。法華経の教えでもって苦の衆生を救済すること、それは正覚が希求することであり、正覚を得たものの方法であるといいうる。即ち、この点からいいうることは、苦の世界における衆生を救出しようとする一途の信念、ただ一筋の道こそが正覚に参入する道程であらねばならない、ということである。菩提心を発し不退転を得た竜女が、その確固たる立場に於て発した法華経に対する誓願に励

んだ事実はこのことを証するものであろう。このことは、法華経のもっている即時性に由来するものと思われる。法華経説示の特徴として五種法師を挙げうるが、それよりは更にその特性を示すものは一念信解であろう。般若経の六波羅密の実践論に対して、分別功德品の説示する如来寿量品の説法を聞き一念信解をなすものの功德は無量にして、八十万億那由佉劫に五波羅密を行せる人の功德にはるかにまされるものである、となす主張は般若波羅密に対して一念信解の即時性の行法を展開したものであろう。正しいものをひたすらに信解するという法華経のこの即時性の主張が提婆達多品に於いては二つの疑問を招来する。その一は智積菩薩の発したもので、釈迦如来は無量劫において難行苦行して徳を積み功を累ねてその結果菩提の道を成じたものであるのに、竜女が須臾の間に正覚を成じたことは信じ難い、となすものである。その二は舍利弗のものである。女人は垢穢にして法器でなく、その上仏道は無量劫を経て修行の果てに成仏するものであるのに、女人の身には五障さえある。竜女が速かに成仏することは信じられない、となしている。この二つの疑問は、仏道は難行苦行して求めるものであるとなす考えに由来する。これに対し提婆達多品は竜女に宝珠を献上させることによつて、この疑問を説明しているが、宝珠の献上よりも成仏は疾いとす主張は即時性の強調以外にあり得ない。しかして、その即時性の背景には法華経の教えに対する強い信仰の存することを無視することは出来ない。法華経に展開された実践論を基調にして、従来、成仏出来得ないとされておった女人論に対して立ち挙げた成果であったとい得ることは出来ないであろうか。この竜女と悪逆の提婆達多の成仏という二つの困難な問題に向つて、大乘の教えをもつて対面した作者の壮図を見得る想が生じないでもないが、しかし何故に即時性を秘めながらも變成男子と称したものであるか、不明であるといわなければならない。

- ② 大正VOL、9 P 106 a
- ③ ケルン、南条本 P 263
- ④ 大正VOL 9 P 35 o
- ⑤ // // P 106 a
- ⑥ ケルン南条本 P 264
- ⑦ 樓神、VOL 35所載・拙論・原始分法華經における般若波羅蜜 參
印度學仏教学研究VOL 10第1号、所載・拙論・一念信解 參

3

女人の成仏を述べるに際して、變成男子をもって解決しようとしている経典は数多く存する。女人劣視の態度は古くからのインドの立場であった。その影響が仏教経典にまで及び、大乘仏教の一切平等の立場との矛盾超克のためになされた言葉であろう、とも考えられうる。しかし、釈尊伝は当時の女人が釈尊の教えのもとに、立派な信仰、すぐれた悟りへの途を歩んだことを示しており、更に、釈尊の女人に対する態度には女人劣視の偏見はなく平等であったことを伝えている。釈尊にあつたかゝる平等の念から、しかも女人は成仏出来ないとする見方に進展していった背景は何であつたのだろうか。その理由の一つとして、しかも極めて重要な鍵を握るものとして仏教僧団 (sangha) の成立を挙げなければならないであろう。釈尊滅后、各自に暗誦せられておつた釈尊の教えが結集され経律を形づくって行つたと称せられておるが、それらは釈尊の対人対機の説法であつた。各種各様の説法を一樣のものにまとめ上げるためにも論の発生が考えられうる。そしてこれらの人々は、その論の考究に専心し、やがて釈尊の教えは仏教集

(50)

団の専用物としての途へ入ってしまった、といわなければならない。即ち、仏教集団のあり方、仏教集団の維持等集団としてのものの見方が重要な関心事となつて来なければならない。ここでは、集団の一員としての人々のあり方として、戒律が尊重せられる。出家僧に対する一般社会人、男性に対する女性、出家僧に対する女性、等の関係について隔別の一線が確されるに至つたものではなからうか。

即ち、仏教集団の維持、尊厳性のために、出家僧に対して、女人に親近すべからずとする戒律が、やがてより積極的に、女人は性劣るものであり五障あるものとする観念と結びつき、女人は成仏出来得ないとする思想を形成して行つたものであろう。

今、五分律卷二十九の比丘尼法の中には次のごとくに示されている。釈尊が成道の後に故郷に帰るのを浄飯王は途中まで出迎えた。釈尊の継母である摩訶波闍波提は五百の釈女等と共に迎えて、釈尊に、女人も仏正法において出家することをゆるされんことを希求したのであるが、これに対し、止みね、止みね、往古の諸仏は女人の出家をゆるさなかつたために、女人は自分で頭を剃り袈裟衣を著し勤行精進して道果を得たのだ、未来の諸仏も是の如し、と釈尊はこれをゆるさなかつた。かくの如く、三止三諍の後、立去つた釈尊を追い摩訶波闍波提と五百人の釈女等は頭を剃り袈裟衣をつけ、舍衛城にある釈尊宿舍の門前にて涕泣しておるのを阿難が見て、その事情を知り、こゝに釈尊と阿難との問答がはじめられる。

阿難復白_レ仏言。若女人出家受_三具足戒_二能得_三沙門四道果_一不。仏言。能得。阿難言。若得_二四道_一。世尊何為_レ不_レ聽_三出家受_三具足戒_一。

と。かくて釈尊は摩訶波闍波提に出家して具足戒をゆるすために八不可越法を受けるのをゆるされた。しかし、釈尊

(51)

は女人に五疑あるをのべた后、阿難にむかつて、

若不聽^レ女人出家受^レ具足戒。仏之正法住^レ世千歳。今聽^レ出家二則滅五百年。猶如^レ人家多^レ女少^レ男。當^レ知。其家衰滅不^レ久。

と語り、これを聞いた阿難は

阿難聞已悲恨流淚。白仏言。世尊。我先不聞不知此法。求聽女人出家受具足戒。若我先知豈當三請。仏告阿難。勿復啼泣。魔蔽汝心是故爾耳。今聽女人出家受具足戒。當應隨順我之所制。不得有違。我所不制不得妄制。

と語り、彼の心情が示されている。尚、この説話は、この外に五分律卷四十八・中阿含經卷二十八にもみられる。

そして、その説示の内容はほとんど同一のものであるといいうる。たゞ、五分律が八不可越法と語るに對し、四分律は八尽形壽不可過法・中阿含經は八尊師法と表現をかえておる。これは、いづれも女人が具足戒を受けるために受持しなければならぬ八つの規則を掲げたものである。

このうちの中阿含經は摩訶僧祇律の中に引用せられている。即ち、その卷三十六の冒頭は、大愛道瞿曇弥が五百人の釈女と共に仏所にいたり、仏に語った言葉として、

世尊。仏興難^レ值得^レ聞^レ法難。今遭^レ如来出^レ世演^レ說甘露妙法一令^レ諸衆生^レ成^レ就寂滅妙証。如^レ大愛道出家線經中広説。

と示している。この大愛道出家線經は即ち中阿含經卷二十八の瞿曇弥經をさすものであり、瞿曇弥は摩訶波闍波提であることも言をまたない。

このような摩訶波闍波提の出家にたいする話題が同様な内容で各処に存することは、やはりこの物語がかなりには

くしれわたって存したものであるといいうるであろう。阿難の心痛泣涙は今後の僧團、或は教法の流布についてものであることは明白である。果して、釈尊自らがこれから形成されるであろう仏教集團乃至教法の流布に着目しておったものであったらうか、教團形成者達が摩訶波闍波提の出家に関連して、教團護持のために形成したものであるうか、即断は出来得ない。いづれにしる、インドを支配していた男尊思想と、男と女との間の性の問題は仏教にも強い影響を及ぼしたものとみる外はないであろう。そして、そのような帰結として、男性にとっての女性としてこれを輕視する動きが形成され、女身不成仏が唱えられるにいたったものであろう。

五分律の八不可越法は

- ①比丘尼は半月応に比丘衆に従うて教誡人を乞うべし。
- ②比丘尼は応に無比丘処に於て夏安居すべからず。
- ③比丘尼は自恣の時応に比丘衆に従うて三事見聞疑罪を請うべし。
- ④式叉摩那は三才戒を學し已らんに応に二部僧中に在りて具足戒を受くべし。
- ⑤比丘尼は比丘を罵るを得ず。白衣家に於て比丘の破戒・破威儀・破見を説くを得ず。
- ⑥比丘尼は比丘の罪を擧ぐるを得ざるも而も比丘は比丘尼を呵するを得ん。
- ⑦比丘尼は畜惡罪を犯ぜんに応に二部僧中にありて半月、摩那埵を行じ、半月摩那埵を行じ已りて応に各二十僧中にて出罪を求むべし。
- ⑧比丘尼は受戒して百才なりと雖もなお応に新受戒比丘を礼拝し起迎すべし。

と述べて、比丘尼はあくまで比丘に従属すべきことを認めて、その自律性は認められておらない。このようなあり

方は、女性劣視の立場からおこるものであらうと思われるが、女性の五疑と相関連する質性を含むものであらうと思われる。

- ① 大正VOL 22・P 185 c } 186c a
- ② " " P 922 c } 923 b
- ③ " " 1・P 605 a } 607 b
- ④ " VOL 22 P 515 a } b
- ⑤ " " P 185 c

各律の八法の差異をしらべるのが目的ではないので、今は五分律のみにとどめる。
尚、十誦律は八敬法の名称を掲げている。

4

如上の点は比丘尼を僧團に加えるについての話題と、比丘尼に対する規則であるが、律蔵がこのように比丘と比丘尼との相異の概念的にみた女性観だけで、比丘尼をしりぞけているものとも思われぬ。即ち、更に女性の本質に探入って、その性の本質をえぐりだして、この点からも女性をしりぞけるべきことを、あるいは女性をさげすんでいる態度を随所に認めうる。今、仮にその一つを記すと、五分律には次の如き指摘をみうる。①

爾時諸比丘尼以手拍女根生愛欲心。遂有友俗作外道者。偷羅難陀亦以手拍女根。女根大腫不能復行。……(尼墮法第七十一拍根戒)

諸比丘尼用胡膠作男根内女根中生愛慾。遂有反俗作外道者。復有一比丘尼作繫著脚根内女根中……(尼墮法第七

十二胡膠作根戒)

諸比丘尼或以一指乃至五指内女根中洗。傷肉血出以此致病。……(尼墮法第七十三過二指節水淨戒)

諸比丘尼剃二处毛。腋下隱处。生愛欲心。遂有反俗作外道者。時偷羅難陀亦自剃隱处毛。其主人家嫁女。女欲見之。便遣住呼。比丘尼即往。時家為女作浴。女言。先便比丘尼浴。即呼令浴。答言。我不須浴。諸女人便強脱衣令浴。因是其剃隱处乎。即問阿瞿何故剃此。便反問言。汝等何以剃之。諸女言。我為男子故。比丘尼言。我亦如是。……(尼墮法第七十四剃隱处毛戒)

等々。そしてこのようなことをなすのは波逸提なりとなしている。即ち、女性がその性本能によって行動することを厳しくいたしましたものだとも思われるが、それにしても微細に説示されすぎているようにも思われるが、或は当時のインドの民俗性によるものかとも思われる。

しかし、このような、女性を痛めつけその心を疵付けるような説示には、その背景がなければなるまい。そして、律蔵の中にみられる背景の二・三として次の如きことが考えられる。

尼僧を加えたがために、正法は甚千年住すべきところが、五百年になったと語った、と伝える記事。比丘尼が比丘に較べてその戒数の多いこと。更に決定的なのは、女人の出家のあったことを、甘蔗田に苗穢と名づける疫病が生じたようなものである、とする説示等々、比丘尼僧團を加えることに好意的でなかった律蔵の立場を示しているように思われる。畢竟、比丘尼僧團は比丘僧團の墮落の原因となるものだとする考えが存していたのではないだろうか。比丘僧團が出家として仏を目指すためには、在家と異り厳しい禁欲が必要であり、そのためには欲望の対象である比丘尼は存しない方が便宜であるといえる。即ち、初期僧團はあくまでも比丘中心のものであったがために、比丘尼に

対する牽制が行なわれた結果に外ならない。

尚、先に引用した五分律の文の内容は四分律・十誦律にも認めることが出来るが、摩訶僧祇律の中にはこれを認め得ない。僧祇律の関係者達には比丘尼に対する寛大さがいささかなりともあったものだろうか。そして、そうだとするならばそのような見方が大乘につながるものであったのだろうか、即断出来ることではない。

そして、これらのことは反面比丘尼を拒否すると共に、更に、女人一般の欠点を挙げることにより比丘尼に対して彼の自制的念をおこさせるべき努力をしたものでもあろう。即ち、初期仏典は女人の五悪・九悪法・八態等を挙げ、女人に近づくべきでないことを説示している。

五悪とは、女人の穢悪・両舌・嫉妬・瞋恚・無反復の五種であり、九悪法とは、女人は臭穢にして不浄・悪口・無反復・嫉妬・慳嫉・喜遊行・瞋恚・妄語・所言輕拳の九種類であり、八態とは、嫉妬・妄瞋・罵詈・呪詛・鎮厭・慳貪・好飾・含毒の八種類である。これらは表現・数量等は異っても内容は同様であるといひ得よう。

五悪は、端正にして比類なき女人を見ると、この女人をして我と共に交わらしめん、との欲念の生ずるとする一比丘がそのために釈尊にむかい禁戒を捨て還俗したいとの意を述べ、釈尊がこれをいさめたのであるがその折女人の本質について五悪を語ったものである。

九悪法は、釈尊が羅闍城に在った時に、摩醯提利なる婆羅門が顔貌端正なる女一を意愛しを將いて来り、彼女を釈尊に提供せんとしたことがあった。その時に長老の比丘がおり、彼は釈尊にこの申出でを受けることをすすめ、若し不用ならば我々に使用されんことを請うたので、釈尊は女人には九悪法ありとして語られたものであるが、彼の長老が彼女には見たところ瑕疝なしとするので釈尊は過去久遠の説話として商客普富と五百人の商人と馬王と梵摩達王と羅

利の物語を語り彼をいさめた。即ち、時の羅利が今の女人であり、梵摩達王が今の長老であり、王が羅利に食われた如くに、女人には九悪法あり梵行のために極めて危険なることを示したものである。

昔、ある婆羅門の娘に年十六なる比類なき美女があった。沙門瞿曇が釈迦族で世に希有な人物なることを聞き彼は娘を釈尊に嫁さんとし、釈尊に断られるや優填王に与え第二の左夫人とならしめた。王は彼女に感されて正の右夫人を縛著射殺せんとしたが正夫人は仏に帰依せるために箭はあたらずに選って王を指す、王は恐れ反心して左夫人を父婆羅門に帰し、釈尊にこのことを語り懺悔したが、その時釈尊が女人はかくの如くであるとして語ったのが女人の八態であった。

以上、長慢な引用を示したが、前二者は仏道を求める者に対する訓戒であり、三は一般世人に対するそれである。その何れもが顔貌端正なる女人の外面に惑わさるべきでなく、女人の醜悪を強調することにより人生の理想像を求めんとするには女人は危険極りないとする相を示して自制をうながした説話であろう。そしてこれらの中から、これらの仏典が出家者と在家者とを区分し女性を劣視する態度と、理想像に対して不必要なるものを極力排除せんとする態度を保持しているように思われる。そして、女人は不必要なるもの有力なる一つといいうるであろう。おそらく、強い伝統、女人の五疑によるものではなからうか。

—未完—

① 大正VOL 22, P 77 b } 89 a
② 波逸提は輕罪の一種にして、所犯を懺悔すれば滅罪をうるけれども、懺悔しなければ惡趣に墮すべき、過のことを名付けている。

③ 大正VOL 2 } P 700 } a
④ 全 2 } P 697 } c
⑤ 全 4 } P 603 } c } 604 } b } 707 } a } b